

天鼓 詞章

登場人物

シテ・王伯（天鼓の父） 間狂言・官人
ワキ・勅使

王伯の元へ勅使がやってくる

ワキ これは唐土（もろこし）後漢の帝に仕へ奉る臣下なり。さても此の国の傍に。王伯王母とて夫婦の民あり。一人の子を持つ。その名を天鼓と名づく。かれを天鼓と名づくる事。彼の者の母夢中に天より鼓降り下り。胎内に宿ると見て出生したる子なればとて。その名を天鼓と名づく。其後鼓降り下り。打てば其の声妙にして。聞く人感をもよおし。歓の声充ち満てり。帝聞し召し及ばせ給ひ。彼の鼓を召されしに。天鼓鼓を惜しみ抱きて山中に隠れぬ。いづくか王地ならねば官人を以て捜し出し。天鼓をば漏水（ろすい）の江に沈め。鼓をば内裏に召され。阿房殿雲龍閣に据ゑ置かれて候。さる間彼の鼓勅にて打たせられ候へども更に鳴る事なし。いかさま主の別れを思い鳴らぬ事もや有らん。親子の事なれば。彼の者の父母を召して打たせらるべきとの勅詔に任せ。ただ今王伯が私宅へと急ぎ候。

悲しみに暮れる王伯が登場する

シテ 露の世に猶老の身のいつまでか。又此秋に残らん。伝え聞く孔子は鯉魚（りぎよ）に別れて。思の火を胸に焚き。白居易は子を先立てて。枕に残る薬を恨む。これ皆祖師文道の大祖たり。我らが歎くは科（とが）ならじと。思ふ思（おもひ）に堪へかぬる。涙暇（いと）無き袂かな。思はじと思ふ心のなどされば。夢にもあらず現にも。なき世の中ぞ悲しき。なき世の中ぞ悲しき。よしさらば思ひ出でじと思ひ寝の。思ひ出でじと思ひ寝の。闇の現に生れ来て。忘れんと思ふ心こそ。忘れぬよりの思ひなれ。唯何故の浮身の。命のみこそ恨みなれ。命のみこそ恨みなれ。

ワキ いか此の家の内に王伯王母のわたり候か。帝よりの勅使にて候。

シテ そもそも何と申したる勅使にて御座候ぞ。

ワキ さても天鼓が鼓を内裏に召されてより。打てどもさらに鳴る事無し。恩愛の事なれば。

シテ 王伯を召して打たせらるべきとの勅詔なり。急いで参内申し候へ。

シテ 宣旨畏つて承り候さりながら。勅にてだにも鳴らぬ鼓の。老人参りて打ち候とも。いかでか音の出で候べき。いやいやこれは心得ぬ。重科の者の父母なれば。かやうに佯（たばか）り召し寄せられて。重ねて失はれん為にてぞ有らん。よしよしそれも力無し。我が子の為に失はれば。それこそ老の望なれ。あら歎くまじややがて参り候はん。いやいやさやうの宣旨ならず。唯々鼓を打たせんとの。其の為ばかりの勅詔なり。急いで参り給ふべし。

勅使に伴われ

王伯は宮殿に参上する

シテ 縦ひ罪には沈むとも。

同音 縦ひ罪には沈むとも。又は罪にも沈まずとも憂きながら我が子の形見に。帝を拝み参らせん。帝を拝み参らせん。

シテ 勅詔にて候程にこれまでは参りて候へども。老人が事をば御免ならせ給ひ候へ。

ワキ よよし鳴らずは力無き事。まず鼓を仕り候へ。

同音 此上は勅をばいかで背くべき。一つは我が子の形見の鼓。声もし出でばそれこそは。我が子の形見と夕雲の。上に耀く玉殿に。始めて臨む老の身の。

生きて在る身は久堅の。生きて在る身は久堅の。天の鼓を打たうよ。

シテ 其の磧礫（せきれき）に慣（なら）って。玉淵（ぎよくえん）の窺（うかが）はざるは。驪龍（りりょう）の蟠（わだかま）る所を知らざるなり。

同音 げにや世々毎の假の親子に生れ来て。

シテ 愛別離苦の思い深く。怨（うら）むまじき人を怨み。悲しむまじき身を歎きて。我と心の闇深く。輪廻の波に漂ふこと。生々世々もいつまでの。

同音 思の絆永き世の。

シテ 苦（くるしみ）の海に。沈むとかや。地を走る獸。空を翔る翅（つばさ）まで親子の哀知らざるや。況や仏性同体の人間。此生に此の身を浮めずはいつの時か生死の。海を渡り山を越えて。彼岸に到るべき。

同音 親子は三界の首枷と。

シテ 聞けば真に老心。別れの涙の雨の袖。凋れぞ増る草衣。身を恨（うら）みても其のかひの。無き世に沈む罪科は。唯命なれや明暮の。時の鼓の現とも思はれぬ身こそ恨なれ。鼓の時も移るなり。涙を止めて老人よ急いで鼓打つべし。

同音 げにげにこれは大君の。忝（かたじけな）しや勅命の。老の時も移るなり。急いで鼓打たうよ。

同音 打つや打たずや老の波。立寄る影も明らけき。

シテ 雲龍閣の光さす。

同音 玉の階。

玉の床に。

ワキ 老の歩みも足弱く薄氷を踏む如くにて。心も危あよおき此の鼓。打てば不思議や其の声の。心耳（しんに）を澄ます声出づる。げにも親子の證（しるし）の声。君も哀と思し召して。龍顔に御涙を。浮め給ふぞ有難き。

シテ 親子の證にて鼓の鳴ること。君も神妙に思し召され候。さる間漏水の江に御幸なり。

ワキ 天鼓をば御弔ひあるべきなり。老人夫婦には数の宝を与えらるべきなり。まづまづ私宅に帰り候へ。

あら有難やさらば罷り帰り候はん。

いかに誰かある。老人を私宅へ送り候へ。

中入

ワキ 帝は漏水に行幸あつて

天鼓を弔う

さても天鼓が身を沈めし。漏水の堤に御幸なつて。同じく天の鼓を据ゑ。

糸竹呂律の声々に。糸竹呂律の声々に。法事を為して亡き跡を御弔ぞ有難き。頃は初秋の空なれば。はや三伏の夏闌け風一声の秋の空。夕月の色も照り添ひて。水蕩々として波悠々たり。

シテ 天鼓の亡霊が現れて

弔いに感謝する

シテ あら有難の御弔やな。勅を背きし天罰にて。漏水に沈みし身にしあれば。後の世まで
ワキ も苦の。海に沈み波に打たれて。呵責の責も隙無かりしに。思はざる外の御弔に浮み
出でたる漏水の上。曇らぬ御代の。有難さよ。

シテ 不思議やな池の汀に現れたる。姿を見れば人間なり。如何なる者ぞ名を名宣れ。

ワキ これは天鼓が亡霊なるが。御弔の有難さに。これまで現れ来りたり。

シテ さては天鼓が亡霊なるか。然らばかかる音楽の。舞樂も天鼓が手向の鼓。打ちて其の
ワキ 声出づならば。げにも天鼓が證なるべしはやは鼓を仕れ。

シテ 嬉しやさては宣旨かやと。夕月耀く玉座の表。

シ・ワ 玉の笛の音声澄みて。

月宮の昔もかくやとばかり。

シテ 天人も影向。

同音 菩薩もここに。

天降ります気色にて。同じく打つなり天の
鼓。

シテ 打ち鳴らす其の声の。

同音 打ち鳴らす其の声の。漏水の浪はとうとうど。打つなり打つなり汀の声の。寄り引く
糸竹の手向の舞樂は有難や。

樂

面白や時もげに。

面白や時もげに。秋風樂なれや松の声。柳葉（りうよう）を払って月も涼しく星も相
逢ふ空なれや。烏鵲（うしゃく）の橋のもとに。紅葉を敷き。二星（じせい）の館の
前に風。冷やかに夜も更けて。夜半樂にもはやなりぬ。人間の水は南。星は北に拱（た
んだ）くの。天の海づら雲の波立ち添ふや漏水の堤の。月に嘯（うそむ）き水に戯れ
波を穿ち袖をかへすや。夜遊の舞樂も時去りて。五更（ごこう）の一点鐘も鳴り。鳥
は八声の仄々と。夜も明け白む時の鼓。数は六つの衢（ちまた）の声に。又打ち寄り
て。現か夢か。又打ち寄りて現か夢幻とこそなりにけれ。

喜多流謡本による。実際の上演に際しては詞章が変わることがあります。